

# 沢田英史アンソロジー八四

えいし

荻原伸・選

## ◆『異客』一九九九年

この空に数かぎりない星がありその星ごとにまた空がある

「この空」から「その星」との「空」へ。ロマンとアンチロマン。

シースルーエレベーター 雨の夜を光の滝壺より浮上せり

「シースルーエレベーター」と「光の滝壺」という把握。驚かされる。

建築は夢に属すと『ジオ・ポンテイ』膝に開きて車中に眠る

「ジオ・ポンテイ」はイタリアの建築家、デザイナー。「膝に開く」が巧い。

うかうかと自分を差し出してしまひさうなポストの口がゆふぐれに開く

「ポスト」に「うかうかと自分を差し出し」しそうになるというおそろしさ。

唐突にポケットティッシュ手渡されそのふにやふにやを持って歩め

り

新樹とふ空にたばしる水の群れ萌ゆる嫩葉わかばとなりて噴き上ぐ

「新樹」を「水の群れ」と把握しているところが新鮮。

そりやあきみ異星人だつて歩いているさスクランブル交差点なんだから

「そりやあきみく歩いているさ」という口語が歌の雰囲気を作り出す。

さういへば思ひつづけてあたつけなごへ行つても客でしかない

この時期の沢田のモチーフ「異客」。

ことばもて象となしてとどめねばこの身に「こころ在りしもたまゆら

魚住卿山先生の書による角川賞受賞記念のテレフォンカードに刻まれた歌。

夢の世にいちごはうめえぞただ喰らへ閑吟集より莓大福

「閑吟集」を持ちだしつつ諧諷する自在さ。

殺生の輪廻の外を漂へるチューブワームてふ生のあるらし

「チューブワーム」には口も肛門もない。

今おれは何をしてゐるヒトといふこんな重たいからだをまとひ

自分への違和感。人であることの違和感。

言葉にて嘘がつけると気付きたる最初のひとの恍惚をおもふ

人類で初めに嘘をついたひとへの想像。「恍惚をおもふ」の「を」◎。

「人はみなおのれの都合で生きてゐる」美濃の蝮の道三の科白

「人はみな馴れぬ齢を生きているユリカモメ飛ぶまるき曇天」

永田紅『日輪』二〇〇〇

熱帯魚の飼育に詳しいことなども何となければどうか知らざる

ひとを知っていくということ。「熱帯魚の飼育」の意外性が効いている。

ああぼくはこの青をみるためにだけけふまで生きてきたやうな空

沢田には絶唱系の歌は少ない。歌のほぼすべてが喩。

凍りたる谷の斜面をたどりゆく冬のけもの目となりて見よ

「冬のけもの目」というなりかわりがリアル。

定期券(あるいは魂)朝ごと胸より抜きて機械に委ぬ

「だれも死ぬ日を知らず人は壁に向き入金してゆくスイカを挿して」

佐佐木幸綱『ムーンウォーク』二〇一一

うみがすきたえずうちよせうちよせてそれでだまつてひいてゆくから  
ら

「木のように目をあけてをり目をあけてゐることはたれのじやにもならず」

渡辺松男『蝶』二〇一一

家族らとメガホン振つたあのころはランディ・バースが神様だった

バース、掛布、岡田の「バックスクリーン三連発」は一九八五年四月十七日。

逢ふまでの時間が好きと君は言ふ逢ふは別れの始めとなれば

何気ない会話から「会者定離」の発想。

天窓のある喫茶店 立春の光が滝となりて降り来る

「立春の光が滝」という表現によって眼前に突如「滝」が出現する。

その都度に異なる我も行く川の流れやさしき一つ名を有つ

「いつか僕も文字だけになる その文字のなかに川あり草濡らす川」

吉川宏志『海雨』二〇〇七

瀬を分けてひたすら黙するあの岩がそこにさうあるいきさつもあらむ

「瀬を早み岩にせかるる滝川のわれても末に逢はむと思ふ」崇徳院。

小径にはゆきやなぎのはな散り敷けり避けて通れる足跡のあり

「避けて通れる足跡」に場面がなままと見えるようだ。

夜の樹に吊り下げられたものたちのこゝろなきこゝろが聞にかがよぶ

「吊り下げられたものたち」とは果実などか。カポータイの短編も思う。

残された言葉をひとつまたひとつふるひ落として木一本になる

「こゝの葉」と言われる「言葉」をふるひ落として「木一本」。つながっている。

◆『異客』以後』『沢田英史集』二〇〇四年

。デイキニアの色ふかまりて夏たけぬ銀河のサンダルはいてらんよ

「サンダルの青踏みしめて立つわたし銀河を産んだように涼しい」

大滝和子『銀河を産んだように』一九九四

竹ひごのヒョーキよぎる夏野原かけぬけてゆく子どもらも風

「ヒョーキ」夏野原」と「子どもらも風」の配合が爽やかで鮮やか。

ゆく車カの流れは絶えずあかねさすテールランプを海渡しゆく

「方丈記」の諧謔をこまごまやってしまうゆとりと技巧。

ユーカリの樹に照りつける夏の日ひかりは昏きまづに乾きて

夏の日ひかりを「昏きまづに乾く」と認識している。

知り猫に何してるのと訊ねればニヤアと答ふるにやあしてるのか

沢田家には猫がたくさんいたよう。「にやあしてるのか」

人気なき午後の電車の窓といふ窓いちめん海がひろがる

「窓といふ窓いちめん」の「海」。眼の前にひろがって見える。

卓上の水より立てるチヌーリップ祝福とうはかくなる形

水によってすっとチヌーリップが立っている。「祝福」の形。

はりぼての猫が招ける中吉のほどよき福を念じそめてき

「うたたねに恋しき人を見てしより夢てふものはたのみそめてき」小野小町

メロンパンの縁のかりかりだけ食べてあとの始末はいつだってぼく

メロンパンの「縁のかりかり」。中心は嫌なのか。

煮凝りの薄さで秋が立つてゐた「もうそんなに残つちやゐないさ」

旧かな・口語の「もうそんなに残つちやゐないさ」。味わい深い。

立ち止まり遠く見つめることもまた勇氣なのだ。ペンギンが言ふ

浜本純逸『遠くを見る』ことばと学び・四〇年『教育企画コヒガシ二〇〇一

◆『さんさしおん』二〇〇七年

日の中うちはあへてかうべを立てるとほとほと思ふ夜の臥床に

二足歩行の人間へのまなざし。「ほとほと思ふ」に実感がこもる。

朝ごとに人のからだで出でてゆくそのおとろへをつくらひもせず

着ぐるみのような「人のからだ」のイメージゆえ「つくらひもせず」となる。

亡びゆくうつしみに依り是の世の駅に向かへば終電が来る

「是の世」と「終電」の付け合わせの妙味。

まぶた閉ぢ眠りの底へおちゆくを虞おそれてゐたころもありしを

「眠り」への虞れを言うこの歌。まだ若い頃の「ことだらう」。

横になり眠りに就くを仕合はせとおもひそめしはいつのころから

眠ることが今度は「仕合はせ」になっている。年を重ねている。

「ことにはにねむれるもまたよきかなと思ひつけるは」の「このこと」

「ことには」は永遠に、という感じ。永眠すること。

なつやまのあをくさやまのやまのはに仁王立ちする大融雲おほたちけむ

「なつやまのあをくさやまのやまのはに」は韻律による序詞的。

ささくれて波立つ海のひろがれる車窓が不意にわが眼を映す

「ささくれ」は「波」にかかっているけれど、転じて車窓に映った「わが眼」にも。

ソ連ていふあの大国ももうないと思ふと夢のやうだねおれたち

「ひとしきりノルウエーの樹の香りあれベッドに足を垂れて ぼくたち」

加藤治郎『サニー・サイド・アップ』一九八七

昨夜おそく戻りし道を今朝はまたあらたに下る生くるといふは

「あらたに下る」には生きる「こと」の一回性と日常の反復性。

言ひ方が言ったことより往々に問題となる言葉といふは

ミケル・デフレレンヌの「テキスト」と「テクスチャー」。

ひつたりと蛙のはだがのみどまではりつきたれば雨を下すことか

「蛙のはだが」と「のみど」は「はりつき」には身体を感じる。

あつあつの鯉鮓をおもひうかづては顔を削ぎゆく寒風に耐ふ

「顔を削ぎゆく」という寒さの表現が新鮮。

朝戸出に鞆を重く感じたり「鎧が、けふは」の木曾殿おもふ

「日ごろは何ともおほえぬ鎧が、今日は重うなつたるぞや。」平家物語。

三か月の診断書出せば職場にはすぐに代わりが派遣されたり

職場に迷惑をかけたくない心理と代替可能な存在であることの傷つき。

ひとといふ戦闘服を脱ぎたればなんぞ未明のあをの沁みくる

「こども」ひとといふ戦闘服を着ぐるみのように着ているイメージ。

社会への復帰目指して只管徒歩しくわんとほ 日日の務めと歩くなりけり

曹洞宗の「只管打坐」の諧謔。リハビリを「務め」としているのも念入り。

同じ木に棲む二羽の鳥甘き実を啄む一羽目守れる一羽

「分がちがたく結ばれた二羽の鳥が、同じ木に住まっている。一羽は甘い木

の実を食べ、もう一羽は友を眺めつつ食べようとしない」『リグ・ヴェーダ』

草の葉にとまつた風をとらへたよ川面にそつと逃がしておやり

「川面にそつと逃がしておやり」。口語が伸びやかでやさしい。

離れゆく最後のボートに手をふりて笑まふ船長にあこがれてゐた

最後まで見送る側に「あこがれてゐたはいま読むとかなしい。

もうあんなまねはできぬとながめやること多くなる」の「日ごろか

な

若さや大胆さなどを「ながめ」ることが多くなつていく。距離がさびしい。

ひとびとの頭上はるかを時は行き徐かに傾ぐ冬の星座オリオン

「徐かに傾ぐ冬の星座」。時間と空間の把握。

日が永くなりましたねと声かけて地下の出口に別れ来にけり

劇的さはないが「地下の出口に別れ来にけり」がとてもいい。

かのときのなつくさはらをかけぬけし風がうそぶく——さんさし  
おん

ランボーに「sensation」という詩がある。沢田によると

「ついに日の目を見なかった同人誌のタイトル」とのこと。

### ◆『さんさしおん』以後

「家族のゐた場所『短歌往来』二〇一二年四月号

タオル掛けに息子のタオルなき跡の壁しらしらと光りてゐたり

息子さんの巢立つたあと、そのタオルはもういつものところにはない。

何歳のわが写し絵か縁先に「ひかりのくに」を小脇にかかへ

「ひかりのくに」という具体が、懐かしさと実感を醸し出す。

ホーム、スイートホームいづくにかわれらもとより旅のものにて

「われらもとより旅のものにて」という認識。さびしくも抑制されている。

「零れ幸ひ『歌壇』二〇一二年九月号

病廊の果てなる窓辺ゆふばえてあればゆるゆる近づき来たれ

「幾山河越えさり行かば寂しさの果てなむ国ぞ今日も旅ゆく」

若山牧水『別離』一九一〇

入院の零れ幸ひこぼれ歩行器にからだあづけて見る夕茜

「零れ幸ひ」という発見。生きなおす沢田英史の姿がある。

四人部屋の廊下の側に看護師ナースらの会話に想ふ梅雨の晴れ間も

入院していて、身体の不自由があつて、しかし精神は健やか。

「花の記憶『短歌』二〇一三年五月号

祖母と見し山神祭のやまざくらいつのことやら忘れてしもた

「山神祭」はふるさと生野のお祭り。

父と花見たる覚えはなけれども高い高いをしてくれたはず

「覚えはない」「してくれただはず」にやや屈折もあるか。

脳出血に倒れた年に車椅子で妻が見せてくれたる桜

「車椅子に病院抜けて眺めたる今年のさくら忘れめやも『さんさしおん』

たれかれのおもかげ頭たすさくらばな介護タクシーの窓にいま見  
る

車椅子生活になつて「介護タクシー」での移動となつたようだ。

「ポトナム」二〇一三年六月号

ときおりを記憶の海ゆ泳ぎ出でまたあらわるる古鯉のムニエル

「夢」なのに「舌解のムニエル」がとでもリアル。

「ポトナム」二〇一三年九月号

牡丹咲く生野古町 銀山のハヤシライスの香ぞ立ち来たる

ふるさと生野はかつて「生野銀山」として栄えた。「ハヤシライス」が匂い立つ。

「ポトナム」二〇一三年十一月号

短歌はわが窓なり扉ドヤにあらざるもピーター・パンは窓ゆ飛び立つ

「私には短歌という、窓がある」「私は風になって窓を

行き交うだろう」『NHK短歌』二〇一〇年八月号

「ポトナム」二〇一四年一月号

車から降りるはずみに花水木の紅き実ひとつ踏みて潰しぬ

「降りるはずみ」「紅き実」「潰しぬ」によって鮮明に場面がひろがる。

「ポトナム」二〇一四年二月号

かならずやさわだえしは不死鳥のごとくよみがえるこの冬越して

歌の巧拙をこえて。言挙げによつて自らを鼓舞しているのだ。

「ポトナム」二〇一四年四月号

病室の窓から見ゆる正月の街の屋根屋根おだやかに照る

年末年始も入院することがあった。下の句のまなざしが「おだやか」。

「ポトナム」二〇一四年六月号

転びても転びてもなおまた起てと達磨煎餅ちようだいしたり

七転び八起きの「達磨煎餅」。「ちようだいしたり」に悲壮感はない。

「ポトナム」二〇一四年九月号

みずからの足にうごくもままならず人頼みにてこの世はわたる

「この世はわたる」の「は」。沢田はこの世の生を刑罰だと長く思っていた。

「泡を食ふ」『現代短歌』二〇一四年十一月号

磨きあげたフロントガラスとんぼらが水面とみるか卵らんうみつくる

「フロントガラス」から池の「水面」連れて行かれる。

「ポトナム」二〇一五年一月号

カツ井の蓋に載りたるたくあんのようなおひとといわれてみたい

どんなひとなのだろうか。表現をおもしろがる沢田の笑顔が見える。

「ポトナム」二〇一五年三月号

「ああしんど」傍はたへに及ぼす重たさを痛感せしゆえいましてきた

「いましめてきた」が悲痛。これ以上は耐えられないという苦しさ。

「ポトナム」二〇一五年九月号

患者とは待つ身にある看護師や医師の都合にあわせて動く

病院での沢田。目も冷静で抑制されている。「待つ」ことは大概つらい。